

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第22回)

鍵

レイ・クーニーという劇作家の芝居を何本か翻訳してきた。いわゆる笑劇 (farce) と呼ばれるドタバタ喜劇の名手で、三谷幸喜氏に「僕の好きな劇作家はアメリカのニール・サイモンと思われているけど、本当はイギリスのレイ・クーニー」と言わせるほど、笑いを生み出す達人である。一言で言えば、サイモンの (アメリカの) 喜劇はいい話だが、クーニーの (イギリスの) 喜劇はいつでもいい話だ。見終わった後、アメリカものは「なるほど、うん」と感じるが、イギリスものは「だから何?」と感じる。前者は「人間、捨てたもんじゃない」と思わせるが、後者は「人間、救いようがない」と思わせる。と、こうして区別を書いていると、そういうイギリスものの笑いの好きな自分は、ひどく悪い人間のような気がしてくる。

クーニーの芝居の多くは、中流家庭 (よりイギリス的に言えば、中流の下の家庭) のリビングルームが舞台になっている。そこに、キッチンへ通じるドア、寝室へ通じるドア、ダイニングルームへ通じるドアなどがあって、人が出たり入ったりして「ドタバタ」になるわけだが、時々こんなト書きがある——「リンダがキッチンへ出て行く。と、ノーマンがキッチンのドアの鍵をかける…」あるいは、「バーバラは寝室へ行く。と、スタン

リーは寝室のドアの鍵をかける…」何かヘンだとは思わないだろうか? この後、キッチンや寝室に閉じ込められた人が内側からノックをして「開けてちょうだい。鍵がかかっちゃってるみたい!」と叫ぶと「あれ? 鍵が壊れちゃったみたいだ、今修理するから待ってて」とリビングにいる人物が誤魔化して、ドアの向こうの人には見られなくなかった何事かがリビングで展開する。ヘンなのは、どうしてリビング側からキッチンや寝室のドアに鍵をかけられるのか、かけられるにしても、どうして向こう側 (内側) から開けられないのか、ということだ。

答えは、こうした「カギ」は、昔ながらの鍵穴——前方後円墳のような形で、中の様子を覗き見できる穴——に鍵を挿して開閉する形のものである。鍵を挿す→回して開ける→鍵を抜く→ドアを開ける→中へ入る→ドアを閉める→ (反対側から) 同じ鍵を挿す→鍵をかける。つまり、同じ鍵で内側からも外側からも開閉できるのだが、閉めた状態で鍵を抜いてしまえばどちら側からも開けられないことになる。日本で翻訳上演する際、これを理解せずに普通にロックしてしまう舞台を何度も見たが、冷静に考えるとおかしい。こういう芝居は鍵がカギなのだ。